

(フロントランナー) 朝比奈一郎さん 「変革を志す人間が教えるから、塾生に火がつく」

2015年6月27日03時30分



リーダー塾では自身のプライベートな体験も語り、塾生の気持ちを引き込む＝東京都港区



(b1面から続く)

――「青山社中」という名前の由来は。

坂本龍馬がつくった亀山社中をもじりました。日本最初の商社とも言われる亀山社中は、商売の一方で国事に奔走した。その姿と会社の理念が重なりました。東京の亀戸や亀有に事務所を構えて亀戸社中や亀有社中もありかなと考えましたが、最終的には、青山霊園に近い現在の場所を見て決めました。明治の元勳たちのお墓がたくさんあるし、「人間(じんかん) 到(いた)る 処(ところ) 青山(せいざん) あり」という言葉も浮かんで。

――青山社中は株式会社なんですね。

私たちは、社会状況に不満があると、政府や役所に「なんとかしろ」と言ってしまうがちですが、本当は自立しないといけない。青山社中は「自立促進法人」とうたっています。そんな自分たちが、NPOや財団として寄付を集めて運営するのは違和感があった。会社として、塾の運営だったり自治体や議員の政策立案のお手伝いをしたり、いろんなことで稼いで、日本活性化へ突き進みたいなど。

――リーダー塾では、どういう人材を育てようとしているのですか。

起業家や政治家になれ、と教えているわけではありません。どんな分野でも、変革者となるような人が巣立てばいい。留学や転職をしたい人にはアドバイスもするし、官僚時代に培った人脈も紹介する。そういうバックアップはします。

■留学で転機

――元から改革志向だったのですか。

昔は、いい大学に入り、就職したいと思っていました。東大法学部に行き、官僚になり、「何をしたいか」ではなくて、地位や名誉に恋々としていたところもありました。入省してからは上司に怒鳴られながら猛烈に働き、ストレス性の胃炎で入院もしました。

留学してから「霞が関ではみんなすごく働いているけど、成果があんまり出ていないよね」という問題意識がわきました。留学しての授業初日には「9・11」の米同時多発テロがあり、「日本はどうなるんだ」と思ったことも大きいです。

――日本では、財務省の親友も亡くなった。

しばらく授業もサボり、動けなくなりました。死を身近なものとして意識してから、人生ははかない、自分は真剣に生きているかと問うようになりました。「義を見てせざるは勇無きなり」と役所改革のことを突き詰めて考えました。それで同時期に米各地に留学している官僚に呼びかけ、仲間集めを始めたのです。

――プロジェクトKが理由で冷遇されたことは。

ありません。「やり過ぎだ」と言われたこともありましたが、おおむね理解してくれる人が多かった。自分のことを(町奉行の元与力ながら幕府に忠言するため蜂起した)大塩平八郎のようだと思っていました。

■節目で死が

――官僚を辞めたのはなぜですか。

プロジェクトの代表を7年やって、「霞が関改革だけやっていて、日本がよくなるのか」という思いが募っていったからです。このころ、義弟をがんで亡くもしました。つくづく何かの節目で死がのぞく。

「政治家にならないか」と誘いもありましたが、自分が政治家になって日本が大きく変わる実感が持てなかった。国や社会のことを考える人はたくさんいますが、アクションを起こせる人がいない。一方、ベンチャー企業やNPOで変革を起こそうとする人もいるけど、国や社会のことまで考える人は少ない。だったら両立する人材を育てようと思ったのです。14年弱働いて退職金は400万円。子どもが2人いてローンもありましたが、「半年で、ものにならなかつたら就職する」と妻に頭を下げました。

――塾を立ち上げた年は東日本大震災があった。

勢いよく拳を挙げたのに、塾の説明会をやっても人は来ない。開講時期を後ろ倒しして、やっと1期生20人を集めました。

――リーダー塾と銘打つところはたくさんあります。どこが違うのでしょうか。

日本が停滞する中、さまざまな挑戦をしたいという若者を募集しています。変革を志す人間が師弟のように教えるからこそ、そういう塾生に火がつくと思っています。でも、いろいろなスタイルの塾があっいい。1人の天才政治家を育てる塾もあれば、行政手腕を磨く塾もある。幕末には、松下村塾もあれば、緒方洪庵の「適塾」もあった。

――今後の目標は。

政策づくりをしたいという塾生も出てきた。彼らと一緒に何かできないか、と考えています。日本のために何でもしますよ。

■プロフィール

★1973年、東京都東村山市に生まれ、埼玉県日高町（現・日高市）で育つ。父は不動産業や土木業などを営み、母は主婦。小学3年生から剣道を始める。歴史図鑑に熱中する子どもだった。中学・高校はテレビも禁止の全寮制の男子校で、司馬遼太郎や城山三郎を読みふけり、歴史上のリーダーへのあこがれを募らせた。

★93年、一浪し東京大学に入学。弁論部に入り、大会で優勝経験も。同県飯能市の道場で剣道を続け3段を取得。「窮すれば変ず、変ずれば通ず」の言葉とともに道場主の薫陶を受ける。

★97年、通商産業（現・経済産業）省に入省。同じ頃、家業が傾き、金策に奔走する。同省では、インフラ輸出やエネルギー政策などに携わる。

★2001年、米ハーバード大学ケネディ行政大学院に留学。日本研究のエズラ・ボーゲル氏らと交流を深めた。写真は卒業式で。

★03年、帰国し、プロジェクトKを立ち上げて代表に。副代表を務めた小紫雅史さん（現・奈良県生駒市長）は「歴史と本気で向き合う男。最初は理論先行だと思ったが、会の活動を通してどんどん行動力をつけた」。

◆次回は、日本の輸入車市場で年初からの累計シェアトップを走るメルセデス・ベンツ日本の上野金太郎社長の予定です。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.